

# SHOW MEY シネマール

★★★

## お名前はアドルフ？

2018年 / ドイツ映画  
配給：セテラ・インターナショナル / 91分

2020 (令和2) 年 7月 19日 鑑賞

テアトル梅田

### Data

監督：ゼーンケ・ウォルトマン  
出演：クリストフ＝マリア・ヘルプ  
スト／カロリーネ・ペーター  
ス／フロリアン・ダーヴィ  
ト・フィッツ／ユストウス・  
フォン・ドホナーニ／ヤニー  
ナ・ウーゼ／イリス・ベルベ  
ン

### ■ ■ ■ ショートコメント ■ ■ ■

◆本作のチラシには「ヨーロッパで大成功を収めた舞台を映画化 歴史とカルチャーで頭脳を刺激し、家族と現代社会を揺さぶる知的エンタテインメント！」との見出しが躍り、次のとおり紹介されている。

〈名づけ〉をテーマにした舞台がヨーロッパ各地で大成功を収め、フランス、イタリア、ドイツでも映画化され大ヒット。子供に“アドルフ・ヒトラー”と同じ名前をつけてもよいのか？当然、戦後は“アドルフ”は殆ど名づけられていない。ナチズムに対するドイツの戦後75年の“本音と建て前”に、たっぷりのユーモアとウィットを盛り込み、ドイツの“今”を描き出す。実力派俳優たちの迫真のノンストップバトルに、ハラハラドキドキの90分間。ディナーを見届けた後には、頭と心を刺激するカタルシスが待っている。あなたの名前にも、こんな驚きの秘話があったかもしれない――。

また、そのストーリーは次のとおりだ。

ライン川のほとりに佇む優雅な一軒家。今宵のディナーに、哲学者で文学教授のシュテファンとエリザベト夫婦は、弟トーマスと出産間近の恋人、幼なじみで音楽家のレネを招待していた。愉快な一夜のはずが、トーマスが生まれてくる子供の名前を“アドルフ”にすると発表したことから、激しい口論へと発展。名前の話はドイツの歴史やナチスの罪、ついには家族最大の隠し事まで暴かれて、ヒートアップした夜はどこまで続く……。

◆哲学者で文学教授のシュテファン（クリストフ＝マリア・ヘルプスト）と、その妻エリザベト（カロリーネ・ペーターズ）が住むライン川のほとりの一軒家で今宵のディナーに招かれた客は、エリザベトの弟のトーマス（フロリアン・ダーヴィト・フィッツ）と出産間近の恋人アンナ（ヤニーナ・ウーゼ）、そして幼馴染で音楽家のレネ（ユストウス・フォン・ドホナーニ）の3人だ。

アドルフ・ヒトラーは演説の天才だったが、ドイツ人は概して理屈っぽいというのがー

一般的な評価。果たしてそうなのか？チラシに写っている、食卓を囲む5人の姿を見ると、そのようだが、トーマスが近々生まれてくるアンナの男の子を「アドルフ」と名付けると表明したところから起きてくる家族のバトルとは、さて如何に？



◆他方、本作冒頭には、忙しくディナーの準備をしているエリザベトに対して、近況報告の電話をしてくる母親ドロテア（イリス・ベルベン）の姿が登場する。夫の死後、社会問題にはじめて目覚めた彼女は最近「開花」し、山に移住。そして、難民受け入れ問題について住民投票を実行すべく署名運動を展開しているらしい。そして、その報告のために、

近時はよく娘に長電話をしてくるらしい。

そんなドロテアは、本来、今宵のディナーの話題に無関係なはずだが、「お名前はアドルフ」という本来のテーマから更に派生して、意外なところに話題が広がっていく中、このドロテアも大変な役割を演じることになるので、この母親にも注目！

◆2010年にフランスで、『名前』というタイトルで上映されて大成功を収めた舞台が、世界40か国以上で上演。そして、フランス、イタリアで映画化されて大ヒットした後、ドイツでも驚きの映画化になったのが本作だ。そう聞くと期待せずにはいられない。

本作冒頭、ピザの配達員がバイクを走らせる中で、ドイツの通りにはゲーティア、ベートーベン、ヴィルヘルム等々、ドイツの有名人の名前が付けられているところが多いことが紹介される。しかし、さすがに「ヒトラー通り」や「アドルフ通り」はないらしい。そして、戦後、ナチスやヒトラーがタブー視される中、自分の子供にヒトラーやアドルフと名付ける親もなくなっただけ。しかるに、なぜトーマスはあえて近々生まれてくる自分の子供にそんな命名を？

本作に見る5人の登場人物たちの論争はそれぞれ熱く鋭い。その上、いかにもドイツ人らしく(?) 皮肉とユーモアもタップリだから、それがメチャ面白い。もともと、意外にもそれはちょっとした冗談だったようだが……。

◆なぜ、トーマスはそんなタチの悪い冗談(?) に固執し、楽しいディナーを台無しにしてしまうような話題提供をしたの? 当然そんな疑問が出てくるが、本作はそんな本来のテーマの他、意外にも、何ともシリアスなこんなテーマ、あんなテーマに次々と広がっていくから、アレレ……。こりゃ、何事も理屈っぽいドイツ人やドイツ人家庭にピッタリの映画だが、ちょっとアクが強すぎた感も……。

2020 (令和2) 年7月20日記